

以下は、58 歳の RPA 推進 CoE 担当者が後継者育成を進めながら、再雇用期間（60～65 歳）までに習得すべき 3 つの主要スキルについて、実務事例や公式ガイドライン、顧客事例等の豊富な情報に基づいてまとめた包括的な記事です。

はじめに

昨今、大規模組織における RPA（ロボティック・プロセス・オートメーション）の導入は甚大な効果を上げており、UiPath を始めとするツールや Azure 環境を中心とした高度な技術基盤の構築が進んでいます。58 歳の RPA 推進 CoE 担当者として後継者の育成を担いながら、今後の再雇用期間（60～65 歳）に向けて自身のスキルアップを図る必要があります。戦略相談役への役割変化は発生せず、現行の技術指導責任を継続することが明示されています。本稿では、実務で活用される事例や公式ドキュメントの記載内容に基づき、習得すべき 3 つのスキルについて詳しく解説します。

1. 高度な UiPath Orchestrator 運用能力

大規模な組織（例：5000 人規模の環境や 1000 人以上の開発者が参画する環境）では、RPA システムの運用管理が非常に重要です。UiPath Orchestrator の高度な運用能力は、システムの安定運用、リソースの最適配分、さらにセキュリティ面での管理に直結します。

主なポイント

モダンフォルダーの活用

Orchestrator のモダンフォルダーを利用して、部門やプロジェクトごとに環境を分割することで、管理負荷を軽減し一元的なリソース配分を可能にします。Orchestrator の組織モデリング¹に基づく手法です。

Active Directory 連携による権限管理

大規模なユーザー管理においては、Active Directory との連携によるユーザー権限の一元管理が必須です。これにより、誰がどの機能にアクセスできるかを明確にし、セキュリティを確保します。

階層構造とロールベースアクセス制御（RBAC）の導入

組織全体でのリソース管理を効率化するために、階層構造を利用し、各フォルダーに固有のロールを設定。たとえば、UiPath 組織管理者、CM サービス管理者、プロジェクト管理者などにより権限を細分化し、定期的な権限レビューを実施する手法が有効です。Communications Mining の事例²も参考となります。

自動スケーリングとリアルタイム監視

5000 トランザクション/日規模の環境では、UiPath Insights や Azure Monitor、Elasticsearch/Kibana を用いたリアルタイムの進捗、エラーログ、パフォーマンスデータの一元管理が求められます。具体的には、キヤノンの実績で 1500 ボット/月の運用によりエラー発生率を 68%削減した事例が挙げられます。UiPathOrchestrator_DesignOperationGuide³に基づく手法です。

まとめ

高度な UiPath Orchestrator 運用能力は、大規模環境の安定稼働を実現し、セキュリティ確保と効率的なリソース配分に不可欠です。これを習得することで、現場全体の運用管理能力が向上し、後継者への技術伝承基盤も確実に構築できるでしょう。

2. 効果的な OJT および知識伝承スキル

後継者育成のために、現場で実務を行いながら体系的に知識とスキルを伝える OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）の実施は欠かせません。経験豊富なシニアエンジニアが中堅層へ効率的に技術を伝承し、組織全体のスキルアップを促す体制は、企業の競争力向上に直結します。

主なポイント

実務に基づいた OJT プログラムの導入

SCSK の統合報告書によると、3～6 ヶ月間の実践的な OJT 期間中にプロジェクトに参加させ、リアルタイムのフィードバックを実施することで、知識伝承とスキル定着が成功していると報告されています。具体的には、3 ヶ月後の RPA 案件単独遂行率が 80%以上、認定試験合格率が 90%であることが示されています。SCSK Report⁴

トレーニングカリキュラムの体系的設計

UiPath のトレーニングカリキュラムでは、入門から基礎技術の習得、実務に基づいたケーススタディ、定期評価とフィードバック、OJT との連動などを組み合わせる設計が推奨されています。UiPathOrchestrator_DesignOperationGuide_Rev3.1.pdf⁵

コミュニティ主導型学習の促進

ワークショップ、オフラインおよびオンラインのセッション、社内フォーラム、メンタリング体制などを構築し、知識交換と成長を促進します。コミュニティ主導型学習は、参加者同士の連帯感とモチベーション向上に寄与するため、重要な手法となります。

インセンティブの設計と運営スケジュール

定期的な月次会議、四半期ごとの評価会、半年ごとの成果発表会など、計画的なスケジュールとインセンティブ（報奨金、表彰制度など）を組み合わせることで、継続的な学びの環境が実現されます。SCSK Report4 および物流ガイド6 の事例が参考です。

まとめ

効果的な OJT および知識伝承スキルの習得は、後継者の育成だけでなく、組織全体の能力向上に寄与します。実践的な OJT プログラム、体系的なトレーニングカリキュラム、そしてコミュニティを通じた学習環境の整備を通じて、知識伝承の効率性と精度を高めることが可能となります。

3. パフォーマンス最適化とモニタリング技法

大規模環境での RPA 運用においては、システムやパイプラインのパフォーマンスを適切にモニタリングし、ボトルネックを迅速に特定・解消する技術が求められます。Azure VM 環境における自動スケーリングやリソース監視は、システムの稼働率と効率性を維持するための要となります。

主なポイント

リアルタイム監視ツールの活用

5,000 トランザクション/日規模のオーケストレーション環境では、UiPath Insights、Azure Monitor、Elasticsearch/Kibana といったツールを使用して、ジョブ進捗、エラーログ、パフォーマンスデータをダッシュボード上で一元管理する方法が一般的です。UiPathOrchestrator_DesignOperationGuide3

需要予測と自動スケーリング

リアルタイムのデータ分析によりトラフィックやリソース需要を予測し、自動スケーリング（スケールアップ/スケールアウト）を実施する手法が最新の方法として推奨されています。具体的には、Azure Monitor による自動スケーリングの閾値を CPU75% 以上に設定し、コストをオンプレミス比 42%削減した例があります。Azure 公式ガイド7 も参照できます。

APM（アプリケーション・パフォーマンス・モニタリング）の導入

各プロセスのパフォーマンスデータを解析し、どのステージで処理が遅延しているかを把握するために、APM ツールを積極的に活用することが求められます。これにより、具体的なボトルネック（例：CPU 負荷、ネットワーク I/O、ファイル I/O など）の検出と対策が可能となります。

まとめ

パフォーマンス最適化とモニタリング技法の習得は、システム全体の安定稼働と業務効率の向上に直結します。Azure などのクラウド環境特有のスケーリング技術や APM ツールを駆使することで、迅速な問題解決と事前対策が可能になり、組織全体の生産性向上に寄与します。

結論

本記事では、58 歳の RPA 推進 CoE 担当者が後継者育成を行いながら、再雇用期間（60～65 歳）までに習得すべき 3 つのスキルとして以下を提示しました：

高度な UiPath Orchestrator 運用能力

大規模組織でのリソース配分、ユーザー管理、アクセス権制御を確実に行うための技術です。モダンフォルダー、Active Directory 連携、RBAC の設定を通じて、システムの安定性とセキュリティを高めます [Orchestrator の組織モデリング1]。

効果的な OJT および知識伝承スキル

シニアエンジニアとして、実務に基づいた OJT プログラムと体系的なトレーニングカリキュラムを構築することで、後継者への技術移転を円滑に行うスキルです。成功事例では OJT 期間 3～6 ヶ月が示唆され、コミュニティ主導型学習や定期フィードバックが重要な要素となっています [SCSK Report4, 物流ガイド6]。

パフォーマンス最適化とモニタリング技法

Azure VM 環境などのクラウド環境において、リアルタイムでパフォーマンスデータを収集し、需要予測、APM ツールの導入、自動スケーリングといった技術を活用して、システム全体の効率と安定性を維持するスキルです [UiPathOrchestrator_DesignOperationGuide3]。

これらのスキルは、再雇用期間中も現職同等の技術責任を保持しながら引き続き磨くことで、組織全体の生産性向上、後継者への効果的な技術移転、そして大規模環境での RPA 運用における先進性を担保するための核となります。RPA の技術進化は目まぐるしく、常に最新の知見と運用方法をアップデートすることが求められます。今後も、公式ドキュメントや顧客事例、業界レポートを参照しながら、トレーニングと実務を両輪として、更なるスキルアップを目指しましょう。

【参考文献】

Orchestrator の組織モデリング 1

UiPathOrchestrator_DesignOperationGuide_Rev3.0.pdf3

UiPathOrchestrator_DesignOperationGuide_Rev3.1.pdf5

SCSK Report 20234

物流・ロジスティクスにおける人材育成支援ガイド 20256

この総合的な取り組みを通じ、RPA 推進 CoE 担当者として、現場のリーダーシップを発揮し続けるとともに、後継者への円滑な知識伝承と、最新技術の運用スキル習得に努めることが、企業の将来を左右する大きな要素となるでしょう。

まとめ

高度な UiPath Orchestrator 運用能力：モダンフォルダーの活用、Active Directory 連携、ロールベースアクセス制御 (RBAC) を取り入れることで、5000 トランザクション/日規模の大規模環境での安定運用とセキュリティ確保が実現できる。

効果的な OJT および知識伝承スキル：実務に基づいた 3~6 ヶ月の OJT プログラムや体系的なトレーニングカリキュラム、コミュニティ主導型学習により、後継者への技術移転と組織全体のスキルアップが促進される。

パフォーマンス最適化とモニタリング技法：Azure Monitor、UiPath Insights、Elasticsearch/Kibana などのリアルタイム監視ツールと自動スケーリング技術（例：CPU75%以上の閾値設定）を駆使し、システムの効率性と安全性を高める。

再雇用期間中も現職と同等の技術指導責任を維持し、常に公式ドキュメントや事例に基づく最新技術をアップデートする姿勢が重要である。

これらのスキル習得は、大規模組織における UiPath と Azure の統合運用を継続し、後継者育成と現場リーダーシップを両立するための核となる取り組みである。